

# 大学適応に影響する高校時代の経験 ——大学ランクの視点から——

辰巳 哲子 リクルートワークス研究所・主任研究員

大学への円滑な移行を課題とした答申が提出されてから 8 年が経過した。しかし、アウトカム指標の一つである大学在留率は、中ランク大学では低下傾向にある。本研究では、インタビュー調査と 4 月、7 月の定量調査を用い、学校ランク別の分析をおこなったところ、中ランク校における大学適応には、高校での「授業」「友人との交流」「心理的経験」が影響するが、高ランク校では高校経験の直接の影響は確認されないことが示された。

**キーワード：** 大学初年次、大学中退、経験学習、移行、キャリア教育

## 目次

- I. はじめに
- II. 先行研究・目的
  - II-1. 過去の経験との接続研究
  - II-2. 本研究の目的
- III. 予備調査
  - III-1. 対象と内容
  - III-2. 結果
  - III-3. 小括・定量調査への課題
- IV. 本調査
  - IV-1. 調査目的と概要
  - IV-2. 分析仮説
  - IV-3. 調査内容
  - IV-4. 分析結果
- V. 考察
- VI. 課題と展望

## I. はじめに

本研究の目的は、中ランクの大学入学後の適応を、高校時代の経験によって説明することにある。

2008 年 3 月に提出された中教審「学士課程教育の構築に向けて」において、高等教育や他大学からの「円滑な移行」を図ることを目的とした初

年次教育の推進がおこなわれた。答申では、初年次教育は「高等学校や他大学からの円滑な移行を図る」ことが明示されている。少子化による大学経営の見直しもあり、大学の初年次教育は、専門教育への導入教育、高校から大学への移行支援教育、進路やキャリアデザインに関する教育としておこなわれている（山田 2015）。しかし、「円滑な移行」のアウトカム指標の 1 つであるはずの「在留率」を確認すると、特に中レベルの大学において低下の傾向が見られ（読売新聞社 2015）、2014 年には 8 人に 1 人が生活面や学習面での不適応を理由に退学していることが明らかになっている（文部科学省 2014）。さらに、高度経済成長期以後、労働市場に参入する労働力人口の高学歴化が進んできているため、大卒学歴の放棄は個人のキャリアに長年にわたって影響する可能性があること示唆されていることを考慮すると、大学不適応問題の打ち手を再考する時期に来ているのではないかと考える。

大学不適応や離学の問題を扱う研究は、問題が発生する前（大学入学前）、問題が起こりやすいとされている時期（入学後すぐ）、問題が起こった後（退学後）の三つの段階に着目したアプローチが考えられる。我が国では 2000 年代以降、主に問

題が起りやすいとされている、大学入学直後の時点に着目した研究蓄積がなされてきているが、大学での適応の問題が発生する以前の中等教育段階を射程とした研究は限られている。代表的な研究として、濱名（2005）による高校時代の対人スキルに関する研究、および田中（2016）の学習スキルに関する研究があるが、個人の「属性」や「意識」に言及したものが多く、大学生活への円滑な移行を目指した、高校における「準備教育」の内容が明らかになっているとは言い難い。

そこで本研究では、大学における適応状況と高校時代の経験の関係を捉え、影響関係を分析し、高校時代の経験が大学入学直後の適応に与える影響を予測する。さらに、入学後の大学生活の内容による適応状態の変化が予測されるため、4月と7月の2時点におけるミニパネル調査を実施し、適応状態の変化に影響する経験をあわせて確認する。最後に、主に高校における経験がどのようなインパクトを与えているのかをまとめ、高校カリキュラムに関する政策対応を議論する。

## II. 先行研究・目的

### II-1. 過去の経験との接続研究

社会人になってからの活躍について就学前・就学後、社会に出る前までの経験によって説明しようとする試みは、労働経済学や教育経済学、教育社会学、教育心理学など分野を超えて蓄積されてきている。労働経済学では、高校時代に無遅刻であることが学歴や働き始めてからの雇用形態に有意な正の影響を与えること、中学時代に運動系クラブや生徒会所属経験がある者は賃金が高くなる傾向にあることなどを示している（戸田ら 2014）。教育社会学では、矢野（2009）が大学時代のデータとして、卒業時の知識能力や学習行動を扱っている。矢野（2009）は学習習慣仮説として、①学んでいる社会人・読書している社会人は、大学時代に既に学習し、読書する習慣を獲得していること、②大学時代に獲得した学習習慣によって、社会人になってからの所得に差が生じていることを

明らかにしている。また、教育心理学においては、学校での経験と入社後の行動の関係は、「意識」や「行動」のレベルで捉えられている（舘野ら、2016）。中原と溝上は『活躍する組織人の探究』の中で、企業で活躍する人材の大学時代の経験について、大学1、2年生時点での「将来見通し」や「自主学習行動」が、学生の知識・能力の獲得に最も効いていると結論づけている（中原・溝上 2014）。国内におけるこれらの知見は、主に労働市場での活躍や代理変数としての所得、昇進スピード、職場適応などを従属変数としたものが多いことが特徴である。

労働市場に出る以前の大学生活の適応を説明している研究は、(1)大学生活の充実について、大学生活の他の活動との関係を分析した同時点を扱う研究、(2)大学生活の充実について、高校時代や大学入学時点といった時間的には先行する経験を扱った2時点の研究がある。前者の同時点研究では、「大学生活の充実」は「授業の主体的な参加」や「課外活動・対人関係」によって高まることが明らかにされている（本田 2002）。後者の大学生活の充実理由をそれ以前の経験に求める研究では、高校での進学動機に着目した研究（安達 1999；半澤 2006；松島・尾崎 2005）がある。これらの研究では、進学先を選択する際に、学業を意識した進学が入学後の大学適応に影響し、大学入学後の不適応を減らすことが示されている。そして、授業への取り組みと適応の関係については、清水・三保（2011）が、「大学での学習観」を扱った2時点調査から、進学理由と学習観の関係を明らかにする試みをおこない、高校時代の進路指導のなかで、大学選択段階に学業面での動機づけをおこなうことの重要性を議論している。

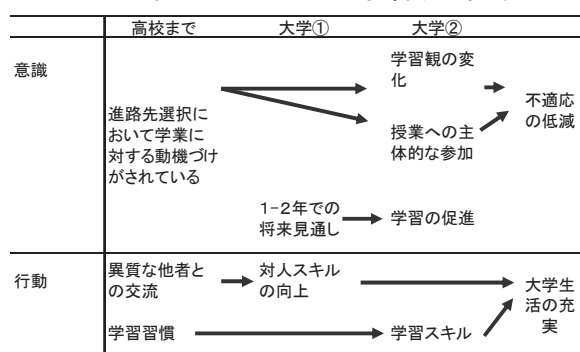
やや乱暴ではあるが、これらの「意識」に関するパスをつなぎあわせると、高校時代の進学先選択において学業に対する動機づけがなされることが、大学入学後の学習観の変化や授業への主体的な参加につながり、そのことが大学入学後の不適応を低減させているという仮説が成り立つ。

高校段階の「行動」に着目した研究では、高校

時代の対人行動に着目した、濱名(2006)がある。濱名(2006)は、大学生を対象に入学直後、7月、10月にかけての3時点調査をおこない、大学入学時点における学習スキルと対人スキルが大学での適応に影響することを明らかにしている。そして、対人スキルは4月から7月にかけて変化するが、7月から10月の間では大きな変化が確認されていないことをあわせて示し、4月に入学した後、7月までに対人スキルを獲得することが、その後の大学生生活の充実に影響することを示している。高校生の対人スキルについては、梅崎・田澤(2013)が、高校生の人間関係とキャリア意識の関係を分析し、「同質な他者」よりも「異質な他者」との深い交流が就業意識を高めることを示している。先に見てきたように大学1、2年生段階の将来への見通しが学習を促進する(中原・溝上, 2014)ならば、「異質な他者との交流」「就業意識」「学習観」の間には何らかの関係があると考えるのが自然であろう。

以上の先行研究における議論を整理すると、図表1のような変数が大学適応に影響していると考えられる。

図表1 大学適応に影響する変数



注: 濱名(2006), 清水・三保(2011), 梅崎・田澤(2013), 中原・溝上(2014)を基に作成

しかし、大学退学者の増加や大学不適応者の数の多さが問題視されながらも、送り出し機関としての高校教育については、これまでの研究では、主に進路指導の側面に焦点があたるのみであった。そして、前述のように「在留率」は中レベルの大学(以下、中ランク校)で低下傾向にあるにもか

かわらず、大学不適応を説明する際に、学校ランクがどのようなメカニズムでインパクトを与えているのかは考慮されてこなかった。

そこで本研究では特に偏差値50~55の大学における対人面での適応過程に着目すると同時に、送り出し機関としての高校教育の機能に着目する。具体的には、中ランク校の大学適応に、高校での経験がどのような影響を及ぼすのかを確認する。

さらに、本研究では、高校カリキュラムに対する示唆を得るため、大学入学後の適応について、個人の「意識」や「意欲」の違いではなく、そうした「意識」や「意欲」を引き起こすに至った学校やその他の場面での出来事や経験に着目する。その際、先行研究のなかで検討されてきた、高校時代の「進路選択」「異質な他者との交流経験」「学習」の三つの側面に関して、彼ら彼女らが実際にどのような経験をしているのか、その経験はどのように大学適応に影響しているのかも考慮した分析をおこなう。

## II-2. 本研究の目的

本研究の目的は、中ランク校での、高校から大学への移行プロセスにおける個人の経験や行動を取り出し、そうした個人の行動を促進するための高校カリキュラム上の示唆を得ることにある。

そこで本研究では、中ランク校における個人の移行過程を捉えるために2種類の調査をおこなう。第1に、予備調査として、中ランク校の学生の高校時代から大学入学直後にかけての経験・行動のバリエーションの把握を目的とした、グループインタビューを実施する。次に、予備調査に基づき、ランクの異なる二つの大学で質問紙調査をおこない、中ランク校における高校時代の経験の違いを量的に確認する。

## III. 予備調査

### III-1. 対象と内容

グループインタビューは、インターネットモニター会社が保有するサンプルのなかから、偏差値ランク 50～54 の都内中規模以上の私立大学に通う1年生を無作為に抽出した。調査開始時に文書と口頭で調査内容を説明し、合意を得た。性別の内訳は、男性2グループ(5名・5名)、女性2グループ(4名・5名)の合計19名である。2015

年3月26～30日に1グループあたり2時間で実施された。

インタビューでは全員に対して、図表2の質問項目に沿った半構造化面接を実施した。

図表2 面接調査の質問項目

1 今の自分に影響を与えた、高校時代の経験
2 大学に入学して1年間で経験した、とまどい
3 大学での現在の居場所、居場所の見つけ方

### III-2. 結果

図表3 属性、高校時代の経験、大学での居場所<sup>1</sup>

属性			高校				大学			
性別	大学規模	ランク	自主学習経験	部活動	異質な他者	バイト	入学前ネットワークへの参加	ファーストコンタクト(自分から)	居場所	クラス所属
M	25,000	C	0	0	0	0	0	0	サークル	0
M	10,000	E	0	0	1	1	0	1	サークル	1
M	7,000	B	1	1	1	1	0	1	部活	1
M	6,000	D	1	1	0	0	0	1	外部	1
M	15,000	C	0	1	0	0	0	1	学校	0
F	4,000	D	0	1	0	0	0	1	サークル	1
F	4,000	E	0	1	1	1	1	1	部活	1
F	7,000	B	1	0	1	0	0	1	クラス	1
F	17,000	C	1	1	0	0	0	1	語学	1
F	25,000	C	0	1	0	0	1	0	入門ゼミ	1
M	7,000	D	0	1	0	0	0	1	合宿メンバー	1
M	6,000	D	1	1	0	0	0	0	高校友人	0
M	8,000	E	1	1	0	0	0	1	部活	1
M	30,000	E	0	1	0	0	0	0	サークル	0
M	15,000	C	0	1	0	0	1	1	サークル	1
F	25,000	C	0	0	1	1	1	1	クラス	1
F	10,000	C	1	1	0	0	0	0	クラス	1
F	25,000	C	0	1	0	1	1	1	サークル	1
F	4,000	D	1	1	1	1	0	1	サークル	1

注) ※1/大学規模は下3ケタ切り捨て。 ※2/学校ランクB 55～59, C 50～54, D 45～49, E 40～44 ※3/フラグの意味 1.経験あり 0.経験なし

以下、予備調査の内容を、①高校での経験、②入学後のとまどい、③居場所の順に確認する。

#### ① 高校での経験

今の自分に影響を与えた高校での経験は、19名中15名が部活動を挙げていた。影響の内容としては、「仲間と顧問の教員が対立した時の仲裁に入った」「サッカーは信頼関係がベースだから、パスを見ていると周りが見えている人かどうか、人となりがわかる」といった葛藤の解決や他者の状況

を捉えるスキルの獲得につながる経験、「演劇部で音響を担当したときの役者と演出との対立や揉め事を解決した」「バスケット部で最後まであきらめない一生ものの友達を得た」「バレエの舞台を仲間と手分けして作り上げた」といった仲間と一緒に何かを完遂した経験、英語のディベートで得た「意見を主張する力」「ハードな部活を続けることができた自信」、ほかには「文化祭での資金を稼ぐために企業にスポンサーをお願いしに行った」「部活の伝統で駅弁を売り切らなければならず、金銭をやり

とりする経験は初めてだった。間違えられない緊張感があった」という、学校活動を通じた「模範的な社会活動」であった。

学校での教科学習は、教科書に基づいた説明を中心におこなわれるものが多く、中央教育審議会(2008)の示した学習の3類型(「習得型」「活用型」「探求型)」にあてはめると、インタビュー対象者の全員が、習得型が「9割以上」と回答しており、高校の授業形態におけるバリエーションを確認することはできなかった。

個人の学習については、自主的な学習をおこなっている者とそうでない者に分かれた。自主学習の内容は、個人が興味のある分野について学校での学習以外に勉強するケースと、授業中に与えられたテーマについて、自分(もしくはグループ)で調べてレポートを書き、発表するケースとがあり、インタビューで「自主学習経験」を尋ねると、後者のテーマや課題があらかじめ示された学習を挙げる者が多く見られた。

高校時代のアルバイトは6名が経験していた。アルバイト経験からの学びは多様であり、「うまくいかないときに修正すること」「自分で悩むだけでなく困ったときには人を頼ること」「幅広い年代の人と会話をする方法」「お金をいただくために働くということ」「それに見合った対応が必要だということ」「仕事ができない自分に対するイライラとそれでも続けることができた自信」など、いずれも学校生活だけでは学ぶことのできない、リアルな社会のなかで行動し、その行動に対する内省や修正を加えていることが示されていた。

また、大学で自分から話しかけることができた理由について尋ねると、学校での部活動や学校外のアルバイトを通じて、『『やらない』より『やった』ほうが後悔は少ないと感じた経験』として、自分から働きかけた理由を説明する者が複数見られた。

## ② 入学後のとまどい

大学入学後の「とまどい」は(1)学習(2)他者との

関係構築が確認された。学習では、「選択が委ねられると思っていたのにほとんど必修で自由がない」「履修できる授業のレベルが低い」「単位の管理を自分でしなくてはならない」といった、制限と自己管理に関するとまどいである。(2)他者との関係構築では、「高校に比べて人間関係が薄い」「地方の人が多し」「家庭環境がバラバラ」「第一希望で入学した人が少なくて、卑屈な人が多い」「レベルが低い人が多くて会話に入っていけなかった(注;その後転学)」という、これまでには接点のなかった異質な他者とのような会話を糸口に関与すればよいかわからない、思っていたよりもレベルが低いのでこの先が不安であるといったコメントが得られた。高校時代に「異質な他者」との接点があったとしても、高校時代のような長時間の接点を持たないなかでの関係構築にはとまどいを感じている者が多かった。

## ③ 居場所の見つけ方

最初の居場所は「新歓コンパに頑張って参加した」と回答する者が多く、その後サークルに加入してそこが居場所になる者、あるいは、大学側から与えられた機会を活用していた。大学から与えられた機会とは、クラス・新入生ゼミ・語学クラスであった。インタビュー中に得られた、「複数のネットワークを保険として持っておく」といった意見に象徴されるように、与えられた居場所と自ら選択した居場所の二つを持つ者がほとんどであった。大学で用意したクラスが存在しない者は4名で、そのうち、語学グループなど「(学校から)与えられた居場所」が存在しない者は2名であり、「図書館で寝ている」「居場所は高校時代の友人」との回答だった。クラスの有無と大学の退学率の関係を見ると、クラスの存在しない大学の退学率は8.2%,10.4%,13.0%と、文科省(2014)によって示された退学率2.65%より、いずれも高い傾向がうかがえた。

また、対象者中5名については、入学前にツイッターで大学のグループを探し、閲覧・参加した

うえで入学式やオリエンテーションで初めて顔合わせをした。グループの存在を知っていて加入しなかった者はこの他に2名おり、2名が加入しなかった理由は、「実際に会ったときのギャップが怖かった」「兄弟・姉妹に（なじめるかどうか）心配しなくても大丈夫と言われた」であった。

### III-3. 小括・定量調査への課題

予備調査の目的は、中ランク校の彼・彼女らが、高校時代や大学生活でどのような経験をしており、その経験から何を学習してきたのか、そのバリエーションを把握することであった。調査の結果明らかになったことは、以下の通りである。

- ・大学1年になった今の自分に影響を与えた経験として「部活動」経験をあげる者が多かった。部活動経験からの学習内容は多様であり、仲間との信頼関係構築や協働スキルの獲得、完遂経験を通じた自信の獲得などが確認された。学校活動を通じた模擬的な社会経験もあった。
- ・教科授業における教授法のバリエーションは見られず、講義型・習得型の授業が中心であり、教師からテーマを示されたなかでの「自主学习」がおこなわれていた。
- ・アルバイト経験では、リアルな社会活動を通じ、自己の行動に対する内省や修正を加える機会になっていた。これには、アルバイト先での先輩など他者からのフィードバックやロールモデルとのかかわりが影響していた。
- ・「自分から話しかけてみよう」「挑戦してみよう」と思えるようになった理由を尋ねると、『やらない』より『やった』ほうが後悔は少ないと感じた経験があり、複数の参加者の共感を得ていた。
- ・大学でのクラスや語学クラス、入門ゼミといった「作られた居場所」が長期にわたり自分の居場所になっているケースが見られた。居場所の設定のない大学では、退学率が高い傾向にあった。また、学生は「保険」として複数のネットワークに所属していることが明らかになった。

これら予備調査の結果を受けて、定量調査への課題を以下のように設定した。

- 1) 自分に影響を与えた高校時代の経験では、ほとんどの者が部活動をあげており、一部では模擬的な社会経験が確認された。また、アルバイト経験がある者は3分の1に上り（19名中6名）、その多くが異質な他者との接点について語っていた。部活動経験が所得やライフスキルを押し上げるとしたいいくつかの先行研究（戸田ら 2014；上野・中込 1998）、特に下位校においてアルバイト経験からの学びのバリエーションが多いとした辰巳（2015）を考慮しても、部活動経験・アルバイト経験を通じた学びは大学の適応に影響していると考えられる。
- 2) 高校時代の経験には、部活動といった物理的な経験だけではなく、「仲間と一緒にやり遂げた」「『やらない』より『やった』ほうが後悔は少ないと感じた経験」といった、「心理的経験」が挙げられた。本予備調査においては、初対面の同級生に話しかける際の説明に用いられていることから、大学の適応に影響していると推察される。
- 3) 高校時代の経験からの学習として確認された、行動修正につながる他者からの介入は、異年齢や属性の異なる他者との接点の有無が影響していると考えられる。
- 4) 先行研究で大学適応との因果関係が確認された、高校時代の学習経験であるが、教授法のバリエーションが確認されなかったため、定量調査では、学習に対する個人の積極性を問うこととする。高校時代の授業への参加の熱心さが、大学適応に影響していると考えられる。

## IV. 本調査

### IV-1. 調査目的と概要

本調査の目的は、予備調査から見えてきたことを前提に、特に中ランク校における高校時代の経験のインパクトを解明することにある。そのため、

中ランク校 (3校) と統制群とした高ランク校 (1校) とで、それぞれ文系の大学1年生を対象とした質問紙調査をおこなった。調査は4月2週目と7月2週目に必修授業を履修する各校の教室で授業の冒頭におこなわれた。回答時間は約10分間であった。中ランク校143名、高ランク校117名から協力を得た。

#### IV-2.分析仮説

先行研究および予備調査の結果から、以下の分析仮説を設定した。①中ランク校における大学適応には、高校時代の授業への参加が熱心であること、部活動経験とアルバイト経験があること、異年齢の他者との複数の接点があることがプラスに影響する。②①のような経験だけでなく、高校時代の「心理的経験」も大学入学後の適応に影響する。以降では、これらの分析仮説について検証をおこなう。

#### IV-3.調査内容

分析仮説を検証するために作成された質問紙の構成は図表4の通りである。

図表4 質問紙の構成

1	フェイスシート(性別,通学形態,入学形態,大学中退経験)
2	大学入学後の経験(授業・友人・バイトなど)
3	大学充実度(5件法) 高校時代の経験
4	①経験:学習、部活動、リーダー経験、バイトなど、 ②心理的経験:『やらない』より『やった』ほうが後悔は少ないと感じた経験、何かをやりきった経験
5	高校時代に自身の成長に影響をくれた人(同質・異質)

従属変数とした「大学適応」は、「毎日の大学生活の充実度合いについて、あてはまるもの1つに○をつけてください」とし、「1.全く充実していない」から「5.とても充実している」までの5段階で回答を促した。7月時点での得点を従属変数とし、高校時代の経験による説明を試みた。大学入学後の経験を調整するため、「大学生活で仲のよい

友人ができた」をコントロール変数として用い、高校時代の経験が7月時点の大学生活の充実度に与える影響を大学ランクごとに確認した。

#### IV-4.分析結果

大学充実度について4月と7月の推移を学校ランク別に確認したのが図表5である。中ランク校は4月から7月にかけて大学充実度の平均値がわずかではあるが低下傾向にあり、一方で高ランク校では上昇傾向がみられる。標準偏差(SD)を確認すると中ランク校では4月より7月のほうがばらつきは大きく、逆に高ランク校ではばらつきは小さくなっている。

図表5 大学ランク別大学充実度の変化

	4月		7月	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
中ランク校	3.74	0.85	3.70	0.97
高ランク校	3.97	0.81	4.01	0.74

次に、中ランク校の学生の高校時代の経験が、大学入学後7月時点の適応に与える影響を検討するために、学校ランク別に重回帰分析をおこなった。結果を図表6に示す。

結果から、中ランク校と高ランク校では、高校時代の経験が大学入学後の適応に与える影響は異なっていることが示された。中ランク校では、外国人との交流経験など、実際に経験したかどうかを問うた経験変数だけでなく、「自分なりにやりきった経験」など、「心理的な経験を問う変数」も大学適応に対して直接的に影響していることが明らかになった。一方の高ランク校では、大学の適応を最も説明しているのは、大学入学後の友人の存在であり、本調査で確認した高校時代の経験は大学入学後の適応に直接的な影響を及ぼさなかった。

次に中ランク校について、具体的に各経験項目を確認すると、中3成績、大学入学後の友人の有無をコントロールしてもなお、「高校時代の教科学習(-)」、「友人と遊びに行く(+)」、「授業の後

友人と話す (+)」、心理的経験変数では「やりきった経験 (-)」「やらないよりやったほうが後悔は少ない (+)」が影響していることが確認された。

図表 6 高校時代の経験が大学入学後の適応に与える影響 (大学ランク別の重回帰分析結果)

	中ランク校	高ランク校
	$\beta$	$\beta$
定数	*	*
性別ダミー：女性 (男性基準)	.004	.175
中学成績ダミー：上・やや上のほう (真ん中基準)	.189 *	.031
中学成績ダミー：下・やや下のほう (真ん中基準)	.199 *	-.006
希望順位ダミー	-.084	.084
大学友人ダミー	.391 ***	.463 ***
高校_経験 1) 外国人との交流経験	.090	.164
高校_経験 2) 年齢の離れた友人・知人との交流経験	-.073	-.085
高校_経験 3) 教科の学習	-.165 *	-.103
高校_経験 4) 文化祭や体育祭などの学校行事	-.027	.031
高校_経験 5) 部活動	.135	-.181
高校_経験 6) リーダー経験	-.015	-.017
高校_経験 7) アルバイト	.037	.069
高校_経験 8) 恋愛経験	.102	.176
高校_経験 9) 友人と遊びに行く	.196 *	-.035
高校_経験 10) 社会人との交流	-.134	-.054
高校_経験 11) インターンシップなどの就業体験	.012	-.047
高校_経験 12) 大学受験	-.022	.042
高校_経験 13) 留学・留学準備	.021	-.091
高校_経験 14) SNS	.079	.080
高校_経験_授業) 授業中、自分から進んで発表した	-.066	.165
高校_経験_授業) 授業後、内容について友達と話をした	.156 *	.006
高校充実	-.037	.024
高校_心理的経験：何かを自分なりに「やりきった」経験	-.154 *	-.029
高校_心理的経験：「やらない」より「やった」ほうが後悔は少ないと感じた経験	.180 *	.154
R2	.246 ***	.224 **

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$   
 $\beta$  : 標準偏回帰係数

図表 7 「何かを自分なりにやりきった経験」と熱心に取り組んだ活動の相関分析

熱心に取り組んだ活動	相関係数
1) 教科の学習	.07
2) 文化祭や体育祭などの学校行事	.10
3) 部活動	.37 **
4) リーダー経験	.15 *
5) アルバイト	-.02
6) 恋愛経験	.18 *
7) 友人と遊びに行く	.12
8) 社会人との交流	.06
9) インターンシップなどの就業体験	.04
10) 大学受験	.05
11) 留学・留学準備	.00

マイナスの影響を与えた変数について、他の変数との関係を確認したところ (図表 7)、「何かを自分なりにやりきった経験」は高校の部活動への取り組みの熱心さとの相関 (.37) が見られた。その他の活動への取り組みの熱心さとの相関は確認されていない。

一方の高ランク校の結果を確認すると、有意な影響が確認されたのは、コントロール変数として加えた「大学入学後の友人」の存在のみである。

## V. 考察

本研究の目的は、在留率の低下が止まらない中ランク校の大学適応のメカニズムを高校時代の経験で説明することにある。大学適応への影響要因が、入学前の進路先選択における学業動機づけ (例えば安達 1999) や学習習慣 (濱名 2005) にあるとした先行研究における知見を一步進め、高校時代の経験だけでなく、経験から得た「心理的経験」の効果、さらに学校ランクの差異を明らかにした。

本稿で試みたことは、インタビュー調査による仮説生成とそれに基づく定量調査の重回帰分析である。大学適応を説明する高校時代の経験のバリエーションを豊かにするためのインタビュー調査からは、今の自分に影響を与えた経験として部活動経験、アルバイト経験が多くあげられた。

次に特に中ランク校の学生に対する影響要因を確認するため、定量調査を実施し、学校ランク別に重回帰分析をおこなった。その結果①高ランク校では、大学の適応について高校時代の経験では



説明できないこと、②両ランクとも、大学友人ダミー（大学生活で仲の良い友人ができた）の影響力が最も大きいこと ③中ランク校では、大学の友人をコントロールしてもなお、「高校時代の教科学習(-)」、「友人と遊びに行く (+)」、「授業の後友人と話す (+)」、心理的経験変数では「やりきった経験(-)」、「やらないよりやったほうが後悔は少ない (+)」が影響していることが確認され、④大学の友人の効果とは独立した高校時代の経験効果が確かに存在していることが示唆された。

以上の中ランク校の大学適応への影響が確認された項目を中心に、(1)高校時代の教科学習、授業内容についての会話の効果(2)友人との交流の効果(3)心理的経験の効果の順に考察を進める。

### ① 高校時代の教科学習・授業内容

これまでの分析を総合すると、高校時代の教科学習については、ほぼ習得型であり、教授方法のバリエーションは確認されていない。教科学習への取り組みの熱心度については大学適応に直接的なマイナスの効果を持つことが明らかになっている。ところが、「授業後、内容について友人と話をした」については、大学適応に対してプラスの効果が示された。これらは一見矛盾した知見のようだが、前者が習得型中心のいわゆる受け身の授業であり、後者は能動的な活動であるとするなら、この相違はパッシブかアクティブかという違いによるものであると解釈できる。つまり、大学適応に対してパッシブな学習はマイナスの効果をもつが、アクティブな学習はプラスの効果を持つ可能性がある。

先に確認したように、先行研究では「大学選択段階に入学後の学業面での動機づけをおこなうことが大学適応を促進する」（安達 1999；半澤 2006；松島・尾崎 2005）とされてきた。本研究の結果からは学業の動機づけのみならず、特に中ランク校においては、高校での授業・学習の在り方が適応を促進することを示唆する結果となった。「授業の後、内容について友人と話す」ことは、

学習内容を振り返る行為でもあり、習得型の授業の後に、授業の中で内容を振り返ることや、個人からの発話を促すような働きかけといった、教授法を問題にする必要があるといえる。

### ② 高校時代の友人との交流

高校時代に「友人と遊びに行く」といった外向的な活動をしていることは大学適応に影響することが示された。先行研究では、大学入学時点の対人スキル（濱名 2005）や、高校時代に異質な他者との深い交流があること（梅崎・田澤 2013）が大学での適応に影響することを示しており、本研究の結果もその一部を支持するものとなった。しかし、主にアルバイト経験を通じて獲得しているであろう「異質な他者」との交流経験については直接の影響を確認することはできていない。本調査で明らかになったように、中ランク校については、高校時代のアルバイト経験から多様な心理的経験をj得ていることが考えられるため、影響の分析には、多様な経験のなかでの「異質な他者」の介入メカニズムを解明する必要があるように考える。

### ③ 心理的経験

3点目として、「やらないよりやったほうが後悔は少ない」「やりきった経験」が、大学適応に与える影響について論じる。重回帰分析の結果、高ランク校では心理的経験の効果が確認されていないが、中ランク校では「心理的経験効果」が存在していることが示唆される結果となった。「やらないよりやったほうが後悔は少ない」は、高校時代に「友人と遊びに行く」経験と同程度の効果を持つことが明らかにされた。インタビューより、大学入学直後に自分から初対面の他者に働きかける際に効果を持つことが予測されるため、この心理的経験を獲得する機会を高校時代に持つことが必要だと考えられる。

一方、高校時代に「何かを自分なりにやりきった経験」があることは、大学適応にはマイナスの影響を与えていた。高校の経験との相関を確認し

たところ、部活動経験との間に低い相関が見られた。これにはバーンアウトの影響も考えられるが、本研究の分析からはその原因を特定することはできない。高校時代の完遂経験と大学入学初期の適応との関係については更なる議論が必要である。

最後にこれらの調査結果から、高校のカリキュラムに対する示唆を得たいと考える。本研究では、特に中ランク大学における大学適応について、改善の兆しが見られないことを課題として取り上げた。結果からは、高校時代の経験は、高ランク校では直接的な影響を確認することができないが、中ランク校ではこれまでに確認してきたようにいくつかの経験が直接的に大学適応に効果をもつことが示された。このことは、中ランク校については、入学する前の高校段階こそが、学校適応にきわめて重要な働きを持つことが実証されたということである。特にパッシブな授業が大学適応にマイナスの影響を及ぼし、アクティブな授業内容がプラスの効果を持つとした本研究の知見からは、高校現場における教授方法の改善が期待される。

## VI.課題と展望

本稿は、学校種間の移行研究の1つの出発点であり、残された課題は多い。第1の課題は、対象者のさらなる拡大の必要性である。本論では中ランク校の適応について、高校時代の経験の効果を確認したが、その視界は予備調査でインタビューした18大学<sup>2</sup>と、定量調査を実施した3大学である。学力水準はコントロールしたものの、大学適応に影響すると考えられる学校規模やクラスの使用は考慮していない。また、本研究は中ランク校の適応についての研究であるが、不適応問題は高ランク校でも共通して見られている。学力格差が拡大するなか、今後、高校時代の経験を学校ランクごとに捉え、それがどのように大学、ひいては社会人になってからの経験にインパクトを与えるのか、これらの課題は稿をあらためて検討したい。

## 注

<sup>1</sup> 偏差値データは「関東地方大学偏差値ランキング 2017年度版」[http://xn--swqwdp22azlevue.biz/kantou\\_c.php](http://xn--swqwdp22azlevue.biz/kantou_c.php) (2016年3月10日閲覧) をもとにし、ランクC偏差値50-54の大規模校で調査会社のモニター選定を依頼した。その後、人数を確保するために対象校を拡大している。

<sup>2</sup> インタビュー対象者は19名であるが、うち同じ大学からの参加者が2名いたため、大学数は18校である。

## 参考文献

- 安達智子, 1999, 「理科系大学1年生の大学選択動機と入学後の適応について: 就業動機志向による比較」進路指導研究: 日本進路指導学会研究紀要: 19.2: 22-29.
- 本田由紀, 2002, 「学生生活が充実していないのは誰か 全国大学生生活協同組合連合会「学生生活実態調査」の再分析 (1991年～2000年) SSSJ Data Archive Research Paper Series, 111-124 濱名篤, 2005, 「新入生の適応と不適応はどのような経験から生まれるか～学習面と対人関係を中心に」, 『大学教育学会誌』, 第27巻, 第1号, 2005年5月, 31-36.
- 松島るみ・尾崎仁美, "大学進学動機と学習意欲・授業選択態度の関連-新入生を対象として." 京都ノートルダム女子大学研究紀要 35 (2005): 177-187.
- 文部科学省, 2014, 「学生の中途退学や休学等の状況について」, [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/26/10/\\_icsFiles/afiel\\_dfile/2014/10/08/1352425\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/_icsFiles/afiel_dfile/2014/10/08/1352425_01.pdf), 2014.10, 2015.10.1 閲覧
- 中原淳・溝上慎一, 2014, 『活躍する組織人の探求 大学から企業へのトランジション』, 東京大学出版会
- 清水和秋・三保紀裕, 2011, 「潜在差得点モデルからみた変化一大学新入生の半年間の適応過程を対象として一」
- 館野泰一, 中原淳, 木村充, 保田江美, 吉村春美, 田中聡, 浜屋祐子, 高崎美佐, 溝上慎一, 2016, 「大学での学び・生活が就職後のプロアクティブ行動に与える影響」日本教育工学会論文誌, Vol. 40, 1-11.
- 辰巳哲子, 2015, 大学中退後のキャリアに影響する大学入学以前の経験. Works review: リクルートワークス研究所研究報告, 10, 6-15.
- 田中亜裕子(2016), 大学不適応学生の個性に応じた支援策の検討, 教育総合研究叢書 9: 19-24.
- 中央教育審議会, 2008, 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について (答申)」。
- 上野耕平・中込四郎, 1998, 「運動部活動への参加による生徒のライフスキル獲得に関する研究」体育学研究 43.1: 33-42.
- 梅崎修・田澤実, 2013, 『大学生の学びとキャリアー入学前から卒業後までの継続調査の分析一』, 法政大学出版局。
- 山田礼子, 2015, 「新時代の初年次教育を考える一 特集一 立教的初年次教育を考える」大学教育研究フォーラム, 20, 44-48.
- 矢野眞和, 2009, 「教育と労働と社会一教育効果の視点から (特集 教育と労働)」日本労働研究雑誌 51.7: 5-15.
- 読売新聞教育取材班, 2015, 『大学の實力』中央公論新社。